悪夢の時間

広瀬 ナチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪夢の時間

【Ｎコード】
Ｎ０７１８Ｏ

【作者名】
広瀬　ナチ

【あらすじ】
転生した先はボンゴレの敵側マフィアだった。
私の心のどこかで、彼らを恨んでいた。
だけど、私は……もう一人の私はあなたたちが好きなのに……。

『自分設定なので、矛盾などがありますが、気にしないでください』

設定（前書き）

ＲＥＢＯＲＮのオリジナル未来のお話です。

オリキャラ設定

安土（あづち）　奏（かなで）

死んだ原因は小説内で

急に記憶が刷り込まれた

転生前のヒロインは、何よりもＲＥＢＯＲＮが好きだった

だけど、転生後はボンゴレを憎む

性格は、明るく純粋だけど、落ちたら真っ黒くなる

容姿は、普通より綺麗で

年齢は、十年後のツナたちと同じ

設定

世界は不平等だと彼女は言った。

彼女は、この世界が憎いと言った。

世界は、憎らしいと彼女は言った。

世界は、その分愛しいと言った。

それもまた、嘘だと彼女は矛盾を話した。

私も心のどこかで同じことを思っていた。

気付いていないのに、心のどこかで苦手意識を抱いていた。

神様は非情だと、彼女はまた言った。

それは分かってるよ。そう言えば彼女は悲しみながら笑った。

もう、私はこの世界から逃げ出したい。

叶わないと思いながら、望んでいたりする。

———ねぇ、あなたの願いは、なに？

設定（後書き）

ふと、浮かんだ設定なので矛盾などが出ますが、自分設定で並行世界と考えてください

止まり木

キキーッと車の急ブレーキの音が響く。

手に抱えた猫は、不安げに見上げてくる。

少しだけ私の手は震えていた。

「お行き……。あなたまで死にに逝くことないよ」

猫を歩道に誘導し、僅かに微笑んだとたん、ユックリとスローモーションだった車が勢いよく私にぶつかってきた。

痛みはない。振動はあった。

苦しみはない。悲しみはあった。

時間はない。未来もない。あるのは……死後の世界。

車にぶつかって死んじゃうなんて、なんて私は……王道的なんだ。

周りの騒然とした空気が爆発したように広がり波打つ。

でも、その音すら私の耳には届いていなくて、ピリピリとして、飛行機に乗ったような痛みが広がっていた。

ゴクッと唾を飲もうとしても、体が動かず、だんだんと喉が渇いてく。

何度も何度も繰り返したが、だんだんと視界が悪くなり真っ暗になる。

体の熱が奪われ消えていく。

痺れてく……。

そんな、かんがえも……なくなって……いく。

かんぜんに……とぎれた。

ピピピと時計のアラームが鳴る。

この時代にしては、幾分か古いそれを私は気に入っていた。

ベットに備え付けされていた棚を、何度か叩けば独特の肌触りがある金属が触れた。

出っ張りのあるツノを触れば音は止み、それを手にして見てみれば十時。

社会人が真っ青になる時間だ。

ちなみに夜中ではなく早朝というには遅いが朝である。

「うぅ……、全く。輪廻転生ってのも……迷惑な話だよ」

過去の記憶を持つ私としては、いつもこれを悪夢として見てしまう。

運が良いのか悪いのか、記憶があるのはつい最近。

嫌な想いをすることも無かった。

「って、遅刻する」

いくら私の上司が温厚な人だとしても、遅刻したら怒られてしまうだろう。

まぁ、仕方もないしある程度、着替えを済ませて化粧などの身支度を整えると、自宅のアパートを出ていく。

最新式の指紋センサーに手を翳すと、ピピッと音がして認証の文字が出て扉が開いた。

ここは、並盛の最新のデパートの地下。

私の上司が、ここを買収し地下にアジトを作った。

「すみません。寝坊しました」
「また、悪夢でも見て遅くなったのかと思ったよ」

私の上司でリーティア。私は、リーさんって呼んでるけど、女の子みたいな名前だが、れっきとした男の人。

私の周りの誰よりもカッコ良く素敵な紳士だ。

私の所属してるマフィアは、名前をアルカーノと言い、最近できたマフィアだけど、リーさんはボスとして立派で頼りになる。

「ボス、奏。会議が始まります」
「ああ、今行くよ」

入り口に立っていた私たちは、すぐに会議室に向かった。

会議室に行けば、もうファミリーは揃っていて、各々、立って待っていた。

私も友人の隣に並ぶと、リーさんは部屋の中央に立ち、先ほどまでの柔らかい表情を崩し、緊張したように顔を強張らせていた。

「みんなも知ってるだろうが、俺らの目的はボンゴレを潰すことだ」
「……っ」

分かっていた。分かってた……。
だけど、信じられなかった。
私の好きなＲＥＢＯＲＮのキャラクターたちが、まさか敵側にいるなんて……。
そして、私が彼らの敵になるなんて……。

「奏、大丈夫？」
「大丈夫……だよ」
「……ボンゴレは憎むべき存在なんだ」

友人のシズクが私の心配をし、リーさんは険しい顔をしたまま言う。

会議が終われば、ファミリーのみんなは足早に出ていく。
残ったのは私とシズクとリーさん。

「前に前世の話をしましたよね」
「ああ」
「確か、ボンゴレが主人公だっけ？　そんな話があるって……。で

も……、ボンゴレは……あなたの言ってる通りではないわ」

シズクの言う通りだと、私は思える。

私が知ってる物語は、十年前の甘い考えを持ったボンゴレだから。

「奏だって知ってるでしょ！　あなたの婚約者や家族が巻き込まれたのを……」

「……」

「シズク。落ち着け。確かにボンゴレは俺らのファミリーの大事な者たちを傷付けた。それは許されるものじゃない。おまえも知ってるだろう？　ボンゴレの業を……」

ボンゴレの業。それは、今の時代に来て彼はボンゴレの業を見た。

なのに、彼は何も思わず、この結末をどのように見てるのだろう。

「確かに、許されないことかもしれない」

私の心の中で、いや、この体がボンゴレを恨んでいて、憎んでいて、どうしようもない。

だけど、心は、魂はボンゴレが好きで好きで仕方がない。

「……」

私たちは無言のまま会議室の時計を見ていた。

何か理由があるわけじゃないけど、ただ時計を見ていた。

「ボンゴレは、確かに憎むべき存在かもしれない」

でも、心のどこかでは信じていたいと思っていた。

ううん。

今も思っている。信じたいと、あのボンゴレファミリーに限って……。

こんな業を引き継がせるなら、沢田綱吉はボンゴレをぶっ壊すと言った。

「奏が言ってるマンガの世界では無いんだよ、きっと。並行世界っていって、パラレルワールドもあるわけだし……」

リーさんの“パラレルワールド”の言葉にドキッとした。

白蘭を思い浮かべたからだ。

「同盟に傘下もいるわけだし、例えマフィア最高のボンゴレとはいえ、俺らに怖いものはない」
「……」

私、前世の私は……ＲＥＢＯＲＮで沢田綱吉、ディーノ、六道骸が大好きだった。

そんな彼らに手を下さないといけないということは残酷で残忍だ。

「ボンゴレに関わってる、女の子たちも？」

声が震えていたことに気付き、リーさんは私の頭を撫でて言った。

「当然だ。これは報復なんだ。あいつらに俺らの苦しみを味あわせないと……」

リーさんの声まで震えていた。
リーさん、誰が失ったかは教えてくれなかったけど、とても大切な人だと周りが言っていた。

憎むべきはボンゴレ。そう刷り込まれてきた。

ううん。私の体の最愛者が苦しみながら死んでしまった。

私という存在を産み、愛してくれた両親や姉弟たちが私の知らないところで、苦しみながら死んでいったなんて……シズクから聞いたとき、私は涙がポロッと出てきた。

一人、ソファーの上で体育座りで考えていた。

「もし……、もしも、私の大好きな人たち死んでたら？」

前世の私は、自らが死んでいるから遺されてる人たちの気持ちは分からない。

『奏！　どこにいるの？』
『奏！　なんで……死んじゃったの』
『奏っ！！』

頭の中で、前世の記憶が廻っている。
母さんや父さん、友達の声が響いていた。

「……グスッ。そっか……遺された側はこんな気持ちなんだ」

悲痛な叫びをするみんなに、心の奥がチクリと痛みを覚えた。

ねぇ、どうしたら全てが元通りになりますか？

拉致ップル

気晴らしにリーさんが出掛けてこいと言ったから私は並盛商店街を練り歩いていた。

私の目がウサギのように真っ赤になっていた。

目薬を注しても私の目が治ることはなかった。

「変な味がする」

目と鼻と口が繋がってると良く言ったものだ。

薬品の変な味が鼻を通って口に感じていた。

気持ち悪くなった私は近くにあった自動販売機でジュースを買った。

自動販売機の横でしゃがみながらジュースを飲んでいた。

「あれ……、あ、そっか値上がりしたんだっけ……」

凛とした綺麗な声がした。

値上がり？
あっ、そう言えば、最近は物価が高くなってジュースなど、一缶辺り百四十円になったみたいだ。だから、小銭が持ち合わせてないらしく戸惑ってるみたいだ。

「いくら足りないの？　あげようか」
「え、でも……」
「良いって！　いくら？」

立ち上がり見た瞬間固まった。
未来編をよく見ていた。
アニメもまた同様に見ていた。

ボンゴレの晴の守護者の笹川了平の妹の笹川京子。
女性キャラで一二を争うほどに好きなキャラだ。

「……いくら、必要？」

瞳が揺れるのを耐えながら笑顔のまま話せば、二十円が足りないらしい。
財布から取り出してあげると、京子は嬉しそうに微笑んでいた。

「ありがとう！　えっと、名前聞いても良いかな？　お金もいつ返せば……」
「ソウ……。安土　奏……。お金は気にしないで、そのくらいだから」

もし、京子がボンゴレに接触するならば、偽名の方が何かと都合が良い。

「奏ちゃんは何歳？」
「私は、二十五歳。京子は？」
「私も同じだよ！　何かの縁かもね」
「縁（エニシ）……か」

公園のベンチで座って話し込んでいた。
こんな縁はいらなかった。

というか、今日は本当にエンカウント率が高いな。
出会いのフラグが立ってるのだろうか？
これじゃあ、一番厄介なフラグが立ち上がるのでは？

「……ねぇ、京子の知り合いに、マフィアとかって、いる？」
「え……？　ツッ君のこと知ってるの？」
「……やっぱり。なんか、不思議なこと無かった？　タイムトラベ

ル……とか」
「……う、うん。私が中学生の時に」

こうやって疑いもなく話してくれる。彼女の良いところで、悪いところかもしれない。

リーさんは彼女を殺すと言った。
私は、それを認めたくなかった。

こんな可愛くて純心な子を、理由があったとしても手にかけたくなかった。

でも、タイムトラベルがあるというなら、確実に沢田綱吉はボンゴレの業を見た。

それでも尚、ボンゴレを継いで壊すことはしなかった。

「マフィアのこと、知ってて一緒にいるの？」
「……うん。ツッ君は違うから」
「なにが……何が違うのさ」
「奏ちゃん？」
「……何でもないよ。何でもない」

京子の言葉が私には嘘か真か分からなかった。

私もREBORNだけを見てるならば、沢田綱吉だけは違うと言えた。

でも、何も違わなかった。

「あ、ハルちゃん！」
「はひっ、京子ちゃん！」

本当にエンカウント率たけーわ！！
三浦ハルがやって来た。
ショートカットの髪で少しだけ落ち着いた様子だった。

「どなたですか？」
「あ……、私は安土　奏だよ。きみは？」
「ハルです。三浦ハルです。奏ちゃん」

可愛いなぁ二人とも……。
こんなカワイイ子を傷付けるなんて出来ないよ。
だけど、ボスの命令は絶対だし……ボンゴレのボスに苦しみを感じてもらわないと……。

「奏ちゃん？　大丈夫？」

「はひっ、大丈夫ですか？」
「……っ」

何でだよ……なんで優しく話するの？
私はきみたちを傷付ける立場なのに……。

「二人は、ボンゴレ好き？」
「はいです！」
「大好きだよ」
「……そっか。じゃあ、沢田綱吉によろしく」
「え、もう行くの？」
「うん。もうちょっと並盛を歩きたいから」
「ごめんなさい！　足止めしちゃった、かな？」
「気にしないで？　気晴らしになったから」

その分、迷いが出てしまったが……。

でも、私は調べなくちゃいけないかもしれない。
何も分からずに彼らに牙を向くことはできない。

迷いもまた新たな道かもしれない。

「失礼ですが、あなたはアルカーノファミリーの安土　奏ですか？」

「……人違いじゃない？　私の家族はいないから」

並盛の一通りのない路地裏にて、背後からの声に背筋が凍った。

私はマフィアを名乗ってるけど、強くはない。

いや、それなりに戦える。

私を転生させた何者かの力で私は強くなった。

「クッフフ。隠さなくても良いですよ」

……この笑い方。あの南国果実しか思い当たらないんですけど！！？

振り返れば、確かに十年後の彼がいた。

言葉を失った私に、六道骸は独特の笑いを浮かべていた。

「確か、ボンゴレファミリーの六道骸だっけ？」

「クフフフ。アルカーノの姫に覚えてもらえるなんて光栄です」

アルカーノの姫？

何のことを言ってるんだろう。

第一、姫に相応しいのはシズクだよ。

あの子、スゴい可愛いしお人形みたいだし……。

なんて言葉を出せば良いんだろう？

「黙って着いてきますね？」

「……」

否定できないし拒否も出来ないだろう。

というか、拒否出来る人がいるなら挙手！！　はい、手を挙げて……。分かりました。手を下ろしてください。

先生の中に留めておきますから、誰にも言いません。

沢田くん、あとで職員室に来なさい。

「……コントは終わりましたか？」

「いやー、先生の役ってやってみたかったのだよ」

「第一、誰にも言わないって言ったのにばらしましたよこの人。まぁ、とにかくさっさと来なさい」

「ぐえっ」

六道骸は私を猫を掴むように襟根っこを持ち上げ歩き出していた。

身長が違うため、足を引きずることもなかった。

「十年前はチビだったくせに……」

「何をブツブツ言ってるんですか」

「……パイナッポー」
「黙りなさい。あなたの苦手なのを見せますよ」
「……」

何なんだよ……こいつ。
マジなんかな？　本当にボンゴレに連れて行かれるの？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0718o/

悪夢の時間

2010年10月10日05時17分発行